

回顧(一)

静岡県 市川 柁 夫

”血の迫害と屈辱の歴史を閉ずる時が来ぬ“と民主グループの指導部より教えられた労働歌を声高らかに歌いながら一日の作業を終えての帰り道あのチタの大通りを五列縦隊で行進したこと、また行進中にも前段と後段とに分けて歩行中の討論会(もちろん、民主教育の一環で、テーマは常にソビエト人民の進んだ途)を行いながら収容所に帰ったこと等々、六十有余年の歳月が過ぎた今でもシベリアの生活を思い出す時、また友達と過去を語り合う時、いまだ頭の中には当時の情景がそのまま残っております。

私は昭和十九(一九四四)年十月まで学徒動員により神奈川県相模原にありました相模造兵廠に勤めておりました。ここでは日本でも優秀な戦車、装甲車及び砲弾関係の材料等の生産に日夜数万人

という従業員が働いていたと聞いております。また私が徴兵のため工場を去った後は風船爆弾も製造しアメリカ本土に向けて飛ばしたとも聞きました。これも私が抑留から解放され帰郷した所、旧友より話として聞いたものです。私は軍隊生活に入る前は比較的軽作業でしたので入隊が決まった時は本当に驚きました。満州牡丹江の東寧第九二九部隊、しかも輓馬十五センチほどの野戦重砲大隊でした。今までの労働からするとかなり重労働だといつときは思いました。本当に大変でした。

また部隊では朝な夕なの点呼時には古参の兵隊から、貴様達は一銭五厘で来るが、馬はその様な簡単な訳にはゆかないのだと、口ぐせの様に初年兵を叱咤。もつとも大砲は馬力により牽引する貴重な動力源であつた事でしょう。我々初年兵は毎日の訓練と不馴れな土地で、疲れた体で食事は馬の手入れと飼付けが終わるまで、空腹と極度の疲れ、これが本隊の教育訓練の真髄ではなかったかと思えます。皆んな夜のベッドの中で男泣きし、涙を

流した事と思います。また北滿の初めての冬は並大抵の寒さではなく、肌身にかなりきつかったと思います。北風吹く宮庭で訓練また訓練、零下二〇度三〇度は当たり前、凍傷に罹った戦友も出ました。しかし馬の手入れは人間より大切に扱う傍ら、南の島では激戦が続いていると聞かされ、関東軍はソビエトと対峙し満州を死守すれば良いのかなあと馬の手入れをしながら一人考えた事もありました。

その矢先に本隊は内地防衛の任に就くために移動すると、どこからともなく情報を耳にしました。私は前々より中隊長小町谷中尉殿よりのすすめもあり幹候試験は未だ先だ、別の兵科を受けてみないかとのお話がありました。私は馬との相性も合わないし、即座に申し出を致しました。昭和二十二年二月ごろだと思います。部隊でも数人の者が東寧において受験致しました。その後中隊長殿より合格の知らせを頂いた、と前後して、いよいよ本隊は内地防衛のため移動となりました。私達数人

は他の残留部隊と混成で軍務にしばらく就きました。それから数カ月正確には五月の初め、新京（長春）の教習隊に教習生として入校する事になりました。戦局は内外共熾烈を極め、私達の教習訓練も急ピッチに進み忙しい毎日でした。八月に入ると全員教育終了になりました。早速配属先が言い渡され、私は新京隊に配属となりました。息つく暇もない、上官より市内の警備巡察を命ぜられ一人馬による始めての市内警備巡察となりました。途中市内において中年の日本人男性に会いました。その人が「兵隊さん、お昼ごろラジオで重大な発表があるそうですよ」と教えられ、早速隊に戻りました。結果は敗戦の知らせ、我が耳を疑いました。しかし現実でした。

それから私たちは南新京の南嶺に集結の命があり現地向いました。既に南嶺にはソビエトの兵隊がマンドリンを構えて警戒についておりました。数日の間に私達は武器を棄て丸裸になり次の結果を待っていました。幾日過ぎたか記憶にありません

んが、次の指示は新京駅から貨車に乗って北へ北へと貨車は進む、果たしてどこに行くのだろう。

着いた所は満州最北の果、黒河に到着。対岸はソビエト領ブラゴエシチェンスクと聞きびつくり。

私達は捕虜としてソビエトに連行されるのか……、一瞬目の先が真つ暗になりました。本当にこの世の中に神、仏が存在するのか、もしあるとしたならばなぜに我々をこの窮地から救ってくれないのか、と私一人考えたでしょうか。中立条約を一方的に破つて満州に侵入したソビエト。日本人が遺した生命財産までも根こそぎ自分達の意のままに本土に持ち返る卑怯者の集団ソビエト。スターリンの意のままに我々はこれからどんな仕打ちが待っているのか、不安いっぱいでありました。既にアムール河を渡る船の中ではソ連の兵士による所持品の略奪が始まっていたのです。日本軍人の携行品、特に時計とか万年筆が奴らの目標であった様に思います。私も軍隊に入る前勤めていた会社の方により記念品として頂いた腕時計を一番先に

取られて本当に残念でなりませんでした。船は目的地に着いたらしくソ連兵が早く早くとわめき立てる様子は牧場の羊飼いが羊を追いつまむによく似たようにも見えました。ここまで来れば我々は絶体絶命、奴らの手中に両手両足をもぎとられたダルマさんと全く同じではないか。異口同音、あちこちにため息が出ました。

また貨車に乗せられスレチェンスクという街に着き、ここから目的地シャフタマに向つたのです。奴らはその日の行動しか得ていないらしく、いわゆるソ連共産党の黒いベールで覆われたやり方と思います。目的地までは数日間野営を続けながら進むという有様でした。

目的地シャフタマに着いてまたびつくり。お粗末この上なしといった建物いや洞窟でした。シラミ、南京虫に襲われながら暮らす毎日。作業はと申しますと森林伐採と鉱山労働以外にはありませんでした。人里を離れた山奥、これが囚人の流刑地であつたようです。また冬は極度に寒い。道路

も凍結し車両の通行もできないという状況の中、われわれの食糧も不足し絶食をさせられた事もありました。

現在、病身の妻と二人暮らし

静岡県抑留者協会会員

いづれにしても大変な人生を送って参りました。今日ここに人間としての生活ができる事の幸せに感謝すると共に、いまだ帰らざる戦友の一日も早く救い出してあげたいと祈るものです。

まだまだ書き続けたい事もありますが、できたら次回に初心を述べさせていたいただきたいと思いません。

略 歴

- 一 大正十三年十一月三日
- 一 天竜市青谷にて生を受ける(八十三歳)
- 一 天竜市二俣小学校卒業、浜松の中学へ進学
- 一 昭和十九年十二月現役兵として徴集
- 一 二十年八月敗戦、シベリア抑留となる
- 一 二十四年十一月 舞鶴へ引揚する
- 一 二十六年浜松市スズキ自動車入社 定年退

職後農業